氏名	曽村　みずき
ヨミガナ	ソムラ　ミズキ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第362号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　第二次世界大戦前後における薩摩琵琶の変動　―演奏会・ラジオ・レコード調査と音楽分析を通して―
論文等審査委員	
（主査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　塚原　康子
（副査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　植村　幸生
（副査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　杉本　和寛
（副査）	武蔵野音楽大学　教授　薦田　治子

（論文内容の要旨）

薩摩琵琶は、明治後期に東京へ進出し全国に普及した、近代琵琶楽の一つである。明治後期から大正期にかけて薩摩琵琶は最盛期を迎えたが、昭和期に入ると次第に人気が低迷し、第二次世界大戦後は演奏の機会が激減した。本研究は、薩摩琵琶の衰退期にあたる1930～40年代を中心とした第二次世界大戦前後において、薩摩琵琶の演奏家の活動状況および音楽内容がどのように変化したのかを明らかにするものである。

薩摩琵琶が衰退した背景として、これまで戦争との関連が指摘されてきたが、当時の具体的な演奏状況や音楽実態は未解明のままである。そこで本論文では、演奏会開催・ラジオ放送・レコード発売状況の調査、および複数の音源資料を用いた音楽分析を通して、戦前から戦後にかけての薩摩琵琶の変動を連続的に検討した。音楽分析では、対象時期に活躍した、錦琵琶宗家・水藤錦穣および錦心流奏者で芝水流宗家・榎本芝水の音源資料を対象に、詞章や音楽構造、語り・琵琶の旋律に注目し、分析を行った。

本論文は６章構成をとる。第１章では、研究対象期間である昭和期を中心に、とりわけ演奏者の派閥移動が激しかった錦心流に焦点をあてて、薩摩琵琶史を概観した。

第２章では、薩摩琵琶の演奏会調査から、戦前期の新作発表や慰問演奏におけるレパートリー、および戦前から戦後にかけての種目・流派を超えた異流合同型演奏会の変遷について考察した。流派から独立した演奏家たちは、既存流派との差異化を図り、新作発表を通して新流派の普及に努めた。慰問演奏では、聴衆を考慮して演目内容を選択するという番組構成の工夫がうかがえた。また、終戦後は戦災により演奏の場が失われたが、琵琶奏者の中には自発的に協働して流派を超えた琵琶団体を組織した者も現れ、演奏の機会を自ら作っていった。

ラジオ放送を扱った第３章では、『NHK番組確定表』を対象に、琵琶番組の放送記録を抽出し、番組編成方針の変化に注目しながら番組内容を分析した。1938年以降、琵琶は時局にふさわしい「教化演芸」として扱われたものの、人気低迷を背景に放送回数は次第に減少した。戦後には、田邉尚雄を中心とした琵琶界外部の力を借りながら、薩摩琵琶・筑前琵琶という種目を超えた番組放送が展開され、演奏者たちの協働への意識改革につながった。

第４章では、主要レコード会社５社の戦前SP・戦後LPレコードの発売内容から、戦前から戦後にかけてのレコードを通した普及を考察した。大正期までの琵琶人気により、昭和初期には各社から多くの琵琶レコードが発売された。1930年代半ばに入ると、廉価盤へと移行しながら発売が続いたが、その数全体は次第に減少した。一方で、テイチクは時局物に注目し、琵琶では日中戦争開戦後に多数の時局レコードの吹込みが行われた。戦後には全集レコードが制作され、近代琵琶楽は伝統音楽の一つとして「古典化」の道をたどることとなった。加えて、薩摩琵琶の新流派を含む新たな収録も行われ、薩摩琵琶の音楽への再評

価に結びついた。

音楽分析に取り組んだ第５章では、戦前から戦後にかけての音楽様式の変化を、２人の演奏家の音源を分析することにより考察した。対象とした演奏は、水藤錦穣の《白虎隊》《本能寺》、榎本芝水の《川中島》《本能寺》である。両者はそれぞれ1930年、1936年に錦心流から独立した経緯があり、水藤は流派創始後まもない時期から語りの旋律で改革を行い、流派確立後の戦後では、他種目の旋律型を摂取しながら、琵琶の旋律に新たな表現を加えた。一方榎本は、戦前・戦後での演奏スタイルに大きな変化はなく、錦心流からの独立に際しては、新作発表やレコード発売など、演奏活動面を多様化したことにより、新流派創始をアピールした。

第６章では、戦争を題材にした新作曲として、水藤《古賀連隊長》《戦艦大和》・榎本《満洲事変》《少年航空兵》を分析し、戦争を題材としたことによる作曲への影響を考察した。音楽内容では、新たな演奏技法やセリフ、他楽器を導入し、さらにこうした工夫は戦後にも継承されたため、時局物創作は音楽的発展につながる試みの場としても機能したといえる。また、水藤《古賀連隊長》・榎本《少年航空兵》は、両者がそれぞれ新流派を創始して数年で発売されたレコードであり、時局物を発表するとともに、その演奏において独自の音楽性を提示しようとした。

以上を総合すると、第二次世界大戦前後における薩摩琵琶の音楽は、次のように展開したと考えられる。名人が不在となった1920年代末以降は、琵琶界を牽引するような後継者が現れず、琵琶界は分断された。低迷期からの脱却も目指して行われた戦争関連の活動の反動もあり、戦後薩摩琵琶の衰退は加速した。一方、戦中期の時局物創作で取り入れた音楽技法は戦後も活用され、時局物の演奏活動は戦後の音楽的発展に影響を与えた。戦後には、近代琵琶楽全体で団結の重要性が認識され、琵琶界外部関係者の協力を得ながら、演奏家たちが復興に向けて自発的に協働関係を構築していった。そして、水藤錦穣の器楽面を中心とした音楽的な試みは、戦後に成立した薩摩琵琶の新流派の基盤ともなり、薩摩琵琶の音楽の発展に寄与した。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、第二次世界大戦前後（1930～40年代）の薩摩琵琶を対象に、演奏会・放送・レコードを通じた音楽活動の実態を調査・分析するとともに、錦心流の榎本芝水と錦琵琶の水藤錦穣の演奏音源を用いた音楽分析によって、この時期の琵琶界が経験した変動の具体相を解明した研究である。

近代琵琶の歴史は、前史、流行期、衰退期、復興期、展開期に時代区分して語られ、本論文が対象とする昭和前期は衰退期とされてきたが、これまで本格的研究がなく、その実態は必ずしも明らかではなかった。それに対して、申請者が琵琶新聞や一般紙、放送記録、レコード会社月報等を網羅的に調べ上げて膨大な基礎資料を作成し、それに基づいて当時の琵琶界の変動を論じたことは、本論文での第一の学術的成果である。加えて、二人の奏者の戦前・戦後の演奏と時局物を採譜・分析し、そこから戦前の様式を変えずに古典化していった錦心流と、常に新たな音楽的可能性を探り続け戦後の鶴田流に道を拓いた錦琵琶との相違を音楽様式の面から具体的に示すとともに、従来は鶴田流の特徴として紹介されることの多かったスリバチの使用が錦琵琶にも見出せることを指摘するなど、薩摩琵琶全体の展開の中での錦琵琶の功績を再考した点も重要である。結果的に、1920年代末には琵琶の流行が峠を越え、名人不在と分裂の混沌状況となり、その打開策でもあった時局物の創作は同時に音楽的新機軸の模索の場でもあったこと、戦後にかつての流行音楽から古典音楽への転換が図られる中、戦中期に試みられた新しい音楽技法が活用されたこと等が明らかになった。総じて、今後の近代薩摩琵琶研究の重要な足掛かりとなる高水準の達成がなされたといえる。

その一方で、論文中の概説部分や用語の定義に曖昧な個所が散見されたほか、音楽分析の記述に際して適切な凡例や読み手に配慮した譜例・図が配されていないために、論旨がストレートに伝わってこない場面も見られた。申請者が行った緻密で膨大な作業の有効性に比して、そこから展開可能なはずの近代琵琶の歴史的変動に関するより大きな議論や、音楽様式についての説得力ある説明が不足気味であった点が

惜しまれる。文章の一層の洗練とともに、今後の申請者の精進に期待したいところである。とはいえ、本論文によって、これまで非常に手薄であったこの時期の薩摩琵琶界の動向を明確にし、戦後の復興と古典化への動きも戦前からの連続した流れとして見通すに至った点は大いに評価されるべきであろう。博士の学位にふさわしい十分な成果を挙げたものと認め、合格と判断した。